

編集後記：「ビッグデータ」という言葉をよく耳にするようになった。よく分からないのでネットで調べてみると「事業に役立つ知見を導出するためのデータ」ということだがあまりピンとこない。データ量だけでなく種類や更新頻度も多いことが重要らしい。Twitter, Facebook, LINEなどのソーシャル・ネットワークワーキング・サービスの膨大なデータを解析することで商品開発などのビジネスに役立てるということまでは想像できるが、我々の生活や社会が大きく変わるほどの影響が本当にあるのであろうか。

現代の天気予報は、各地の気象観測データのほか、気象衛星「ひまわり」や気象レーダーなどの膨大な観測データを用いて、スーパーコンピュータで計算する数値予報モデルの結果が基礎となっている。その意味では、既に「ビッグデータ」を扱ってきたと言えるのではないか。ただし、観測データの量と種類と頻度が増えれば予報も当たる、というような単純な話だけではないと思われる。

先日の台風接近に伴い「朝の予報では15時頃から雨が降ると言っていたのに18時になっても降っていなかったので今日はもう降らないと思った」とか、「今日は暑くなると言っていたのに日が照らず風も強くて寒いくらいだった」とかという身近な人の天気予報に対する愚痴を聞いていると、まだまだやるべきことは多いと感じる。

折しも今年つくばで開催された気象学会春季大会の公開気象講演会のタイトルが「気象情報のビッグデータ時代の幕開け」であった。従来の気象データに比べて、量も種類も頻度もビッグになった観測データを用いることで、高解像度短時間予測などの新しい天気予報の実現が期待される。ビッグデータはそのままでは役に立たないが、解析や処理を施すことで新しい知識や情報が得られるそうだ。その方法や結果を論文や記事として後世に残すことも重要であり、「天気」もその役割を担っていると考えている。（佐藤晋介）